

進む郷土を進める新聞

小千谷新聞

〒947 0028
 小千谷市城内二丁目六番五号
 シティビル三階
発行所 小千谷新聞社
 電話 (八二二) 二二七八番
 FAX (八二二) 二八一八番
 編集発行人 小見山 紘喜
 印刷所 株式会社 下印刷

サンガ師の著書 に学ぶべきもの

当市木津出身の高僧・天台宗叡山学院々長の堀澤祖門師から、親友の関源司氏(本町、元市教育委員長)を紹介してサンガラトナ・法天・マナケ著『波瀾万丈! インドの大地に仏教復興——日本の心をもつインド人仏教僧・奮闘記』(春秋社)が届けられた。

小欄は残念ながらサンガ師との面識はないが、市内には少年サンガ君、青年僧サンガさんを知る人も多いのではなからうか。小欄も市内の人からサンガ少年が九歳で日本に来て、小学校に通い始めすぐ憶えた言葉が「あは」で、当市に来た折り「お前アホやなあ」を連発して大人を苦笑いさせたこと、堀澤師から夜遅く麗の坂本から比叡山まで、危険なケーブルカーの線路沿いに登って来て堀澤師を青ざめ

させたことなどは聞いていた。

よってサンガ師が九歳で来日し、十五年間堀澤師の元で修行、インドに戻るまでの前半は興味深く読み進んだ。多感な少年期を日本で過ごしたサンガ師は母国語を忘れてしまい、夢を見るのも日本語、思考も心も全て日本人



そのものとなったと知り驚いた。インドへ戻る直前、師匠に「私はインド人だろうか、日本人だろうか」の悩みを打ち明け、堀澤師も一瞬言葉を失うが「サンガよ退いて消極的に考えたら駄目。インド人でもあり日本人でもある。それが自分の強み」と進

んで積極的に考えよ」との言葉を贈った——

後半は著書のタイトルの中にもあるインドの奮闘記なのであるが、日本人として考えさせられることが実に多かつた。日本人からの浄財を得て「子供の家」を作り、現在四〇人程の子供を預っているが、子供がこの施設にきた当初は、皆食べるものが最大の夢で、きちんと食べられることが分かって、一日の全てを台所の前で過ごし、全身全霊をご飯を食べることに費す。そこにあぐらをかき先に進もうとせず、食べる以外の夢を持たせることがひと苦労とのこと。翻って日本はどうか。今さら言うまでもないが、食べ物や粗末にすることは日常茶飯事で、今週号三面にあるように小学校給食を残さないで食べるのが称賛される。大きな記事となるのである。このギャツ

プを日本人は真剣に考えるべきで、格差社会などを声高に叫ぶ前にすることであろうに。

日本人のボランティアの心も考えさせられた。自分の子供が使ったノートを初めてと大量の文房具をインドに贈る。インドでは大いに役立つが、何故に自分の子供に使わせないのであるうか、とサンガ師は「これからの日本が心配」と綴る。日本のボランティア大学生のお金ありき、物ありきの行動・心。交流会でのインドの学生が伝統的な歌、日本の学生は自分達の世代しか知らない歌で、「日本に対する愛情を感じられない。愛情を持たない方が国際人と思っ

ているのか。戦後教育の大きな影響か」と日本人の心を持つサンガ師ならではの言葉だ。堀澤師や両親は永遠に超えられぬ存在とする考え方にも感動を覚えた。